

## 第 35 話〈東岸寺用水〉の要約と参考資料

### 第 35 話〈東岸寺用水〉の要約

土呂久の南 4 キロの東岸寺は、谷底の水を桶に汲んで馬に運ぶしか水のない集落でした。大火で全焼したあと、水を欲して土呂久川に水源を求め、1855 年に 233 日かけて 5.5 キロの用水路を開通させました。その難工事を土呂久の人たちは冷ややかに見ていました。

### 第 35 話〈東岸寺用水〉の参考資料

#### 3 5 - 1 東岸寺

土持孫太郎が記した「疎水誌碑面文」（東岸寺用水通水 150 周年記念誌「扇の峰」P14）

吾が岩戸村ハ山岳重疊、続キヲ以テ山又山ヲ以テシ、僅少ノ耕地其ノ間ニ点在シ地勢複雑、高低甚ダシ、水利ノ便ニ乏シ。而シテ当地ハ土呂久川、山裏川ノ上部ニ位シ、北ニ山ヲ負ヒ、東西ハ山裏川ヲ隔テ宇山裏ニ臨ミ、西ハ土呂久ニ沿ヘル一小部落ニ過ギズ、往時、水田皆無ニシテ、米穀ハ遠ク他方ヨリ供給ヲ仰グノ状態ニシテ、特産物タル麻苧製造ノ如キ最モ不便ヲ感ジタル所ナリ。

殊ニ殊ニ飲料水ハ常ニ溪谷ニ汲ミテ、馬ノ背ニ依リテ運搬シ、僅ニ其ノ用ヲ充タスニ過ギズ、其ノ困難名状スベカラザルモノナリキ。（以下略）

#### 3 5 - 2 東岸寺用水の開通

藤寺非宝「岩戸村田成開発史」P80

東岸寺用水は安政 2 年（1855）2 月 9 日より同 9 月 19 日迄に全部掘通し、悉皆成就したのは 10 月 5 日の水流初めで、これが都合 233 日を要したことになる。元来、この東岸寺は水の全くない所で、冬期は谷底より馬にて飲用水を運び上げたのであるが、昔より水を求むること甚だしかった。そのみならず、安政 2 年（1855）より 36 年以前の文政 2 年（1819）10 月朔日八ツ半頃百姓源右衛門方を火元にて、棟数 40 軒部落ほとんど全焼といふ悲惨事を惹起した。勿論これは水無き結果であるが、村人の水を要望する心理状態は正にこれ狂的であったともいへよう。それでこそかかる難工事を僅か 233 日にして終了せしめる事が出来たのである。

#### 東岸寺土地改良区の沿革（「扇の峰」P12）

土地柄元来水利に乏しく、渇水季節には深い岩戸川や土呂久川狩底溪谷から牛馬に桶を背負わせて、水を汲み上げていたという。この不便な生活を襲ったのが文政 2 年（1819）10 月 1 日夜半の大火であった。茅葺きの棟 40 軒余の集落は瞬時に全焼したのであろう。

このいまわしい大火から 32 年目の嘉永 5 年（1852）の秋、かねて願い出していた宮水役所（日之影町宮水）の用水路開削第一次の下見が行われ、二次の見分も受けて、当時の岩戸村 12 代庄屋土持霊太郎信贇の説得と指導のもと、東岸寺・岩元井手下 22 軒が佐藤伝太、馬原折之介を総代とする組合を設立した。

安政 2 年（1855）正月、延岡藩主内藤能登守政義公の開削許可を受け、金百両を借用して工事に着手。藩は技術者として高松由松を派遣して、土呂久川駄渡瀬から東岸寺まで 50 町 42 間（5530 メートル）を溝幅 3.5 尺、深さ 2 尺掘りで一部を石垣積みとしたが、中でも土呂久折原の口屋坂掘り抜き（トンネル）の難工事は、今でも語り草である。

この大工事を支えたのが千石夫といわれ普請役目と称して出夫した、近隣近郷（岩戸村・山裏村・三田井村・下野村・上野村・田原村・川内村・押方村・向山村）5 千 2 百名余の農民で、藩の御用達示の作業であった。そして安政 2 年（1855）10 月 5 日の朝 9 時半頃、土路久駄渡瀬より流し始めた水は、午後 6 時頃に東岸寺へ流れ着いた。安政 2 年 2 月 9 日より工事を始めて、1 年足らず 233 日目の夕方、井手下組 22 軒の家族が待ちあぐむ東岸寺へ流れ着いたのである。

井手端に立って滔々と流れる水を迎えた老若男女は、感激のあまり狂喜し、むせび泣き又は小躍りしたと庄屋日記は伝える。今もその喜びが伝わる 22 名の通水記念碑と水神石は扇の峰に立っている。

通水により開田面積は拡大し、2 年後の安政 4 年には、221 枚を開いた（庄屋日記）。東岸寺は村一番の米所となり、先人達が成し終えた偉業は、今豊かな村づくりの基盤となった。

#### 東岸寺新用水普請覚

土路久駄馬瀬より東岸寺の上之地境と申所迄式千八百九拾七間也

覚

一、人足	43 人	五カ村門
一、同	57 人	上村門
一、同	21 人	土呂久門
一、同	61 人	東岸寺門
一、同	44 人	永の内門
一、同	51 人	野方野門

〆 277 人

右者 東岸寺新用水普請に付 当村中より献納に罷出相働候人足、前段の通に御座候

卯 5 月 岩戸村庄屋兼帯 土持寛太郎

甲斐亮典「用水路開発にみる西臼杵郡の地域性」（宮崎大学教育学部地理学卒業論文；1952 年 12 月 25 日）

東岸寺用水路は当時、長さ 58 丁 42 間、所要日数 233 日、人足しめて 270 人、その他千石夫 1743 人、平人足 1730 人等と見えており、その費用金 98 両 3 分 3 朱、錢 137 匁は実に 45 年間の長きを要して、苦心の末返済されている。

岩戸村庄屋御用日記による開通の喜び

十月五日 晴天

一、右用水方にて土呂久に罷越

一、今日、四ツ頃、水流れ始め候処、暮六ツ頃東岸寺へ水流着申候。二月九日より今日迄二百三十三日にて水流着。井手下式拾貳間老若男女井手端に立出で、皆歓びの声暫らく鳴りも不止。大乘院（黒原、山伏）相招即刻水神祭、御神酒上致し、夜半頃東岸寺出立帰舎。

藤寺非宝「岩戸村田成開発史」P48

\*明治 4 (1871) 年 岩戸村の田 7 町 3 反 8 畝 16 歩半

そのうち 東岸寺の田 3 町 1 反 5 畝 27 歩

以上、概見するに（明治初頭の）開田に最も尽力せるは東岸寺門である。同門たる黒原、東岸寺両部落は、大平部落と同じく水全くなく、冬期は馬の背にて五ヶ瀬川の水を汲み上げたものであったから、これまで 1 枚の水田とても無かったのである。所が、黒原用水、東岸寺用水、山裏日向用水の開通を見るに至り、一躍、岩戸村第一の田所（たどころ）となった。

### 3 5 - 3 東岸寺用水の水利権

佐藤全作さんの話（1983 年 12 月 14 日聴取）

明治のころ、東岸寺用水は通っていても、土呂久の者に水利権はなかった。土呂久の者は、用水路開削に協力せんかったから、水利権は渡さん。悪口ばかり言うて、「どうして

東岸寺まで水が行こか）……。ところが、通ったもので土呂久も欲しくなった。

うちの田に用水が使えだしたのは（うちの親父の谷蔵が 20 歳になるかならんかのころ）大正 14, 15 年ごろのこと。それまでは「塩井のもと（しうんもと）」の湧き水を使っていた。

### 3 5 - 4 折原「中」の開田記念の水神石

佐藤全作さんの話（1983 年 12 月 14 日聴取）

\*水神石 明治 12 巳卯四月十日

新開田 □□間

新開主 佐藤辰平

弁指（べんざし）をしていた辰平じいさんが田を開いた記念に建てた。1反2畝の田を自分の手だけで（機械があるわけじゃなし）竹モッコで石を引いて開いた。明治12年開いた。700人方、手をかけて。1人5千円の日当として350万円（今のお金で）。田を開いた記念の碑が建つのは、岩戸でもうちだけじゃろう。水は塩井のもと（しうんもと）の湧き水をひいた。今は、東岸寺の水利権を買った。